〇はじめに

調査地は平城京左京七条一坊七坪の西半分にあたります。南北 73 m・東西 32 mの範囲（面積 2,336 ㎡）を、令和2年5月7日から調査しています。

〇検出遺構

今回の発掘調査では奈良時代の掘立柱建物 17 棟、掘立柱塀 15 条、井戸1基、溝などを確認し、大きく分けて4時期の宅地の変遷が明らかになりました。そのうちⅡ期・Ⅲ期では、大型の東西棟建物が南北に立ち並び、ほぼ同じ位置に建て替えられていることが明らかになりました。なお、掘立柱塀6～ 15 は現時点では時期が不明のものです。

【Ⅰ期】 小規模な建物群 桁行 10 m未満の小規模な掘立柱建物が中心で詳細は明らかではありませんが、宅地内を溝で分割して利用していたと考えられます。発掘区北側で東西棟2棟（建物3・7）、南北棟2棟（建物5・9）、南側で南北棟1棟（建物 17）、合計 5 棟を確認しました。

【Ⅱ期】 南北に並ぶ大型建物群 Ⅰ期と比べて建物の規模が大きくなり、東西 1/4 分割線をまたいで桁行 10 m以上の東西棟建物3棟（建物2・12・16）が南北に並んで配されます。建物2は桁行 10 間（19.1 m）、梁行2間（3.6 m）の南面庇付東西棟建物で、Ⅱ期の主屋と考えられます。建物2の南側、坪内南北 1/2 分割線に沿って建物 11・12 が、更に南には建物 16 が配されます。

【Ⅲ期】 Ⅱ期の大型建物の建て替え Ⅱ期に引き続き、桁行 10 m以上の東西棟建物（建物1・13・15）が建てられます。Ⅱ期とほぼ同じ規模の建物が概ね同じ位置に建て替えられています。建物1は梁行2間（約 5.8 m）、桁行6間（約 17.8 m）の南面廂付東西棟建物で、Ⅲ期の主屋と考えられます。建物1の南側には3棟の東西棟建物（建物 13・14・15）が配されています。柱穴の規模も、1辺1m以上と他の時期と比べ大きくなります。

【Ⅳ期】 小規模建物 Ⅳ期になると建物の規模は小さくなり、桁行 10 m以下の小規模な掘立柱建物（建物8）が中心になります。建物8は梁行2間（3.6 m）、桁行3間（5.4 m）の南面廂付東西棟建物で、Ⅳ期の主屋と考えられます。

〇調査の成果 **左京七条一坊七坪における 1/2 町以上の宅地利用が明らかに！**

今回の発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物・塀や井戸などを確認し、左京七条一坊七坪が少なくとも4時期にわたって宅地利用されていたことが分かりました。特にⅡ期・Ⅲ期には、坪内東西 1/4 分割線と坪内南北 1/2 分割線をまたいで南北に大規模な建物が並ぶことから、1/2 町以上の宅地が推定できます。

今回の調査地は平城宮から離れてはいるものの、平城京のメインストリートである朱雀大路に近い場所にあたります。そのような場所で大型建物が建て替えられながら南北に並び、1/2 町以上の宅地利用がおこなわれていたということは、平城京の宅地利用について考える上で重要な調査成果といえます。

B発掘区　全景（南西から撮影）

平城京左京七条一坊七坪の調査　2020.10.3
奈良市教育委員会　文化財課　埋蔵文化財調査センター
〒 630-8135　奈良市大安寺西二丁目 281 番地　TEL　0742-33-1821

平城京左京七条一坊七坪の調査

2020
奈良市教育委員会

A発掘区（南から撮影）

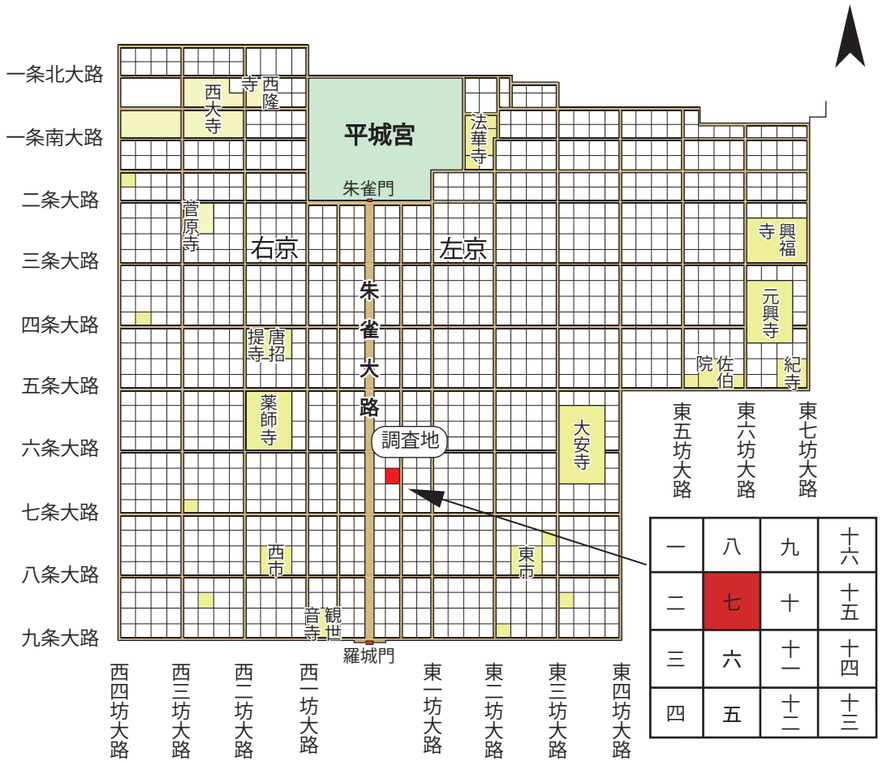


図１　平城京条坊復元図と調査地

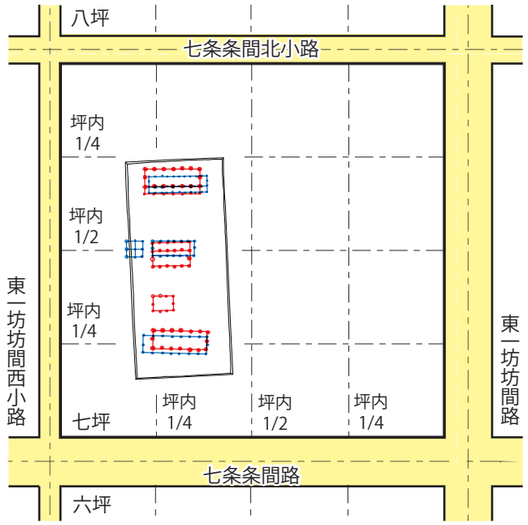
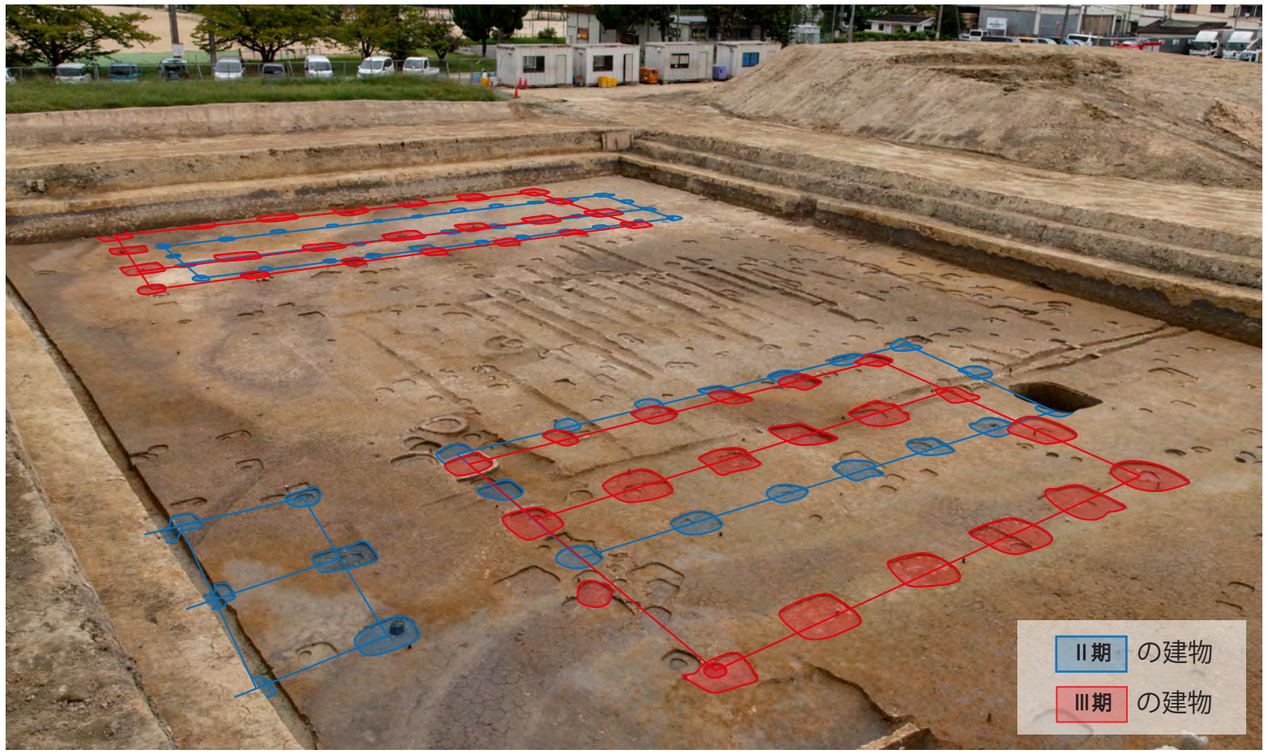


図２　左京七条一坊七坪と調査位置



Ⅱ・Ⅲ期　主要建物検出状況（南東から撮影）

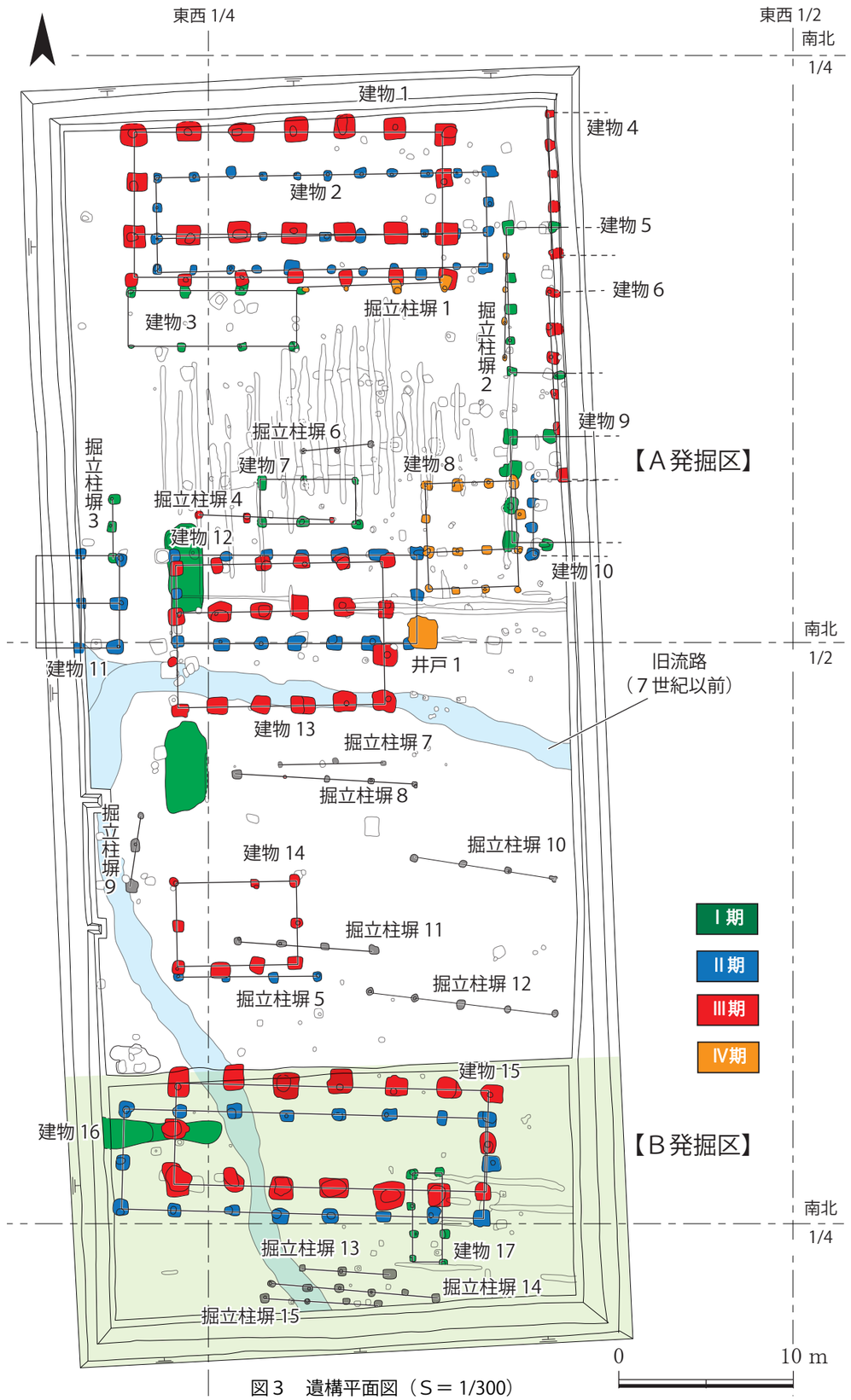


図３　遺構平面図（Ｓ＝ 1/300）